

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第94号

平成27年 7・8・9月



国宝 阿弥陀三尊像（伝橘夫人念持仏） 奈良・法隆寺

特別展

開館120年記念特別展

白鳳

—花ひらく仏教美術—

7月18日(土)～9月23日(水・祝)

東・西新館

名品展

中国古代青銅器

通期開催
青銅器館

奈良国立博物館一二〇年の歩み — 陳列館を中心に —

野尻 忠 (当館学芸部企画室長)

今年、平成二十七年(二〇一五)の四月二十九日、奈良国立博物館は開館から一二〇年の記念日を迎えた。一二〇年前の明治二十八年(一八九五)当時、当館の施設名は「帝国奈良博物館」であり、所管は宮内省であった(その後、文部省・文部科学省の所管を経て、現在は独立行政法人国立文化財機構の一施設)。

話は開館からやや遡ることになるが、明治二十二年(一八八九)のこと、すでに活動を開始していた東京の博物館(現在の東京国立博物館)を「帝国博物館」

とし、その統括のもとに帝国京都博物館と帝国奈良博物館を設置することが決定された。これが現在へと続く奈良国立博物館の創立ということになる。建設地として奈良公園の一部が充てられ、明治二十五年六月に陳列館の建設を開始し、同二十七年十二月に竣工した。そして翌二十八年四月に開館の日を迎える。

当館においては、この開館当初から立つ本館(図1)。現在のなら仏像館。「旧帝国奈良博物館本館」の名で重要文化財に指定)が、長い間、唯一の陳列館であった。



図2 昭和41年(1966)、第19回正倉院展



図1 開館の頃の当館



図4 現在の八窓庵



図3 平成10年(1998)、東新館オープン
奥が東新館、手前が西新館

が、戦後に正倉院展が毎年開催されるようになったこともあり(図2)、展示スペースが手狭になってきたため、昭和三十年(一九五五)頃から新館の建設が模索され、ようやく昭和四十二年に動き始める。そして昭和四十八年四月二十九日、当館七十八歳の誕生日に、新館(現在の西新館)開館記念展がオープンした。しかし、その後も漸次入館者数は増加し、殊に正倉院展における混雑の問題は深刻であった。昭和末年には展示面積拡張の構想が持ち上がり、その構想は平成五年(一九九三)に具体化して、平成六年より同九年にかけて現在の東新館が建設される。そして同十年四月二十五日、当館百三歳の誕生日の四日前に、東新館開館記念の特別展が開幕した(図3)。

東新館の建設により、収蔵スペースが新館に一元化されることとなり、それまで昭和十二年(一九三七)十月竣工の二階建て収蔵庫(本館の南側に立つ)に収められていた藏品も新館の収蔵庫に移された。藏品が移された後、しばらく空きスペースとなっていた二階建て収蔵庫は、平成十四年(二〇〇二)、改修のうえ中国古代青銅器(坂本コレクション)の常設展示室として使用されるようになり、現在に至っている。

さて、陳列館以外にも当館には様々な建物があり、また、かつてあった。現役のものに、明治三十五年(一九〇二)竣工の旧奈良県物産陳列所(現在の仏教美術資料研究センター)、大正三年(一九一四)頃に正倉院掛の古裂修理作業室として建設された平屋木造建物(現在は茶室控室として使用)などがあるが、さらに古いものとして、明治二十七年の本館竣工より前から当館の敷地に立つ建物がある。それが茶室の八窓庵(図4)で、現在は西新館南側の庭園内に所在する。この建物は、もと興福寺大乗院にあったが、明治初年に他所へ売却されようとしていたところを地元の有志がこれを停め、明治二十三年、当時設置が決定したばかりの帝国奈良博物館に献納することになったものである。今から一二〇年前、当時の博物館開設に対する地元の期待の大きさを窺わせるエピソードである。

◆七月十八日より地下回廊において、開館一二〇年記念「写真でたどる奈良国立博物館のあゆみ」(パネル展示)を開催します。

名品展

中国古代青銅器

(坂本コレクション)

青銅器館

中国古代の商(殷)から漢代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。爵、觚、罍、鼎、鬲、高、簋、盃、豆、盤、匜、盥、壺、鏡、鐙など(すべて当館)

【表紙写真解説】

国宝 阿弥陀如来三尊像

(伝橘夫人念持仏)

銅造 鍍金
像高(中尊)三三・三三・三三cm
(両脇侍)二七・〇cm
白鳳時代(七世紀)
奈良・法隆寺

橘夫人(県犬養橋三千代)(?)

七三三)の念持仏であったと伝承される阿弥陀三尊像。橘夫人は橘諸兄や光明皇后の母であり、天武・持統・文武・元明の四代の天皇に仕え、また元正天皇や聖武天皇とも密接な関係を有し、白鳳から天平前期の宮廷において重要な役割を果たした女性である。

本作は、蓮池を表した金銅板から生い出る三茎の蓮華上に、坐し、あるいは立つ三尊像を中心とする。中尊頭部の後方には華麗な透彫りの頭光があり、さらに背後には後屏が立ち、ここに阿弥陀如来の住む極楽浄土に転生した菩薩や化仏、蓮華や蓮葉、さらに雲文などが濃密に表される。これらを納める木製の厨子にも菩薩や僧形が描かれる。

当時の金工・彫塑ならびに木工技術の粋を尽くした本作は、高貴な人物に関わるものであるが、橘三千代であれば不足はない。彼女は邸内に私的な持仏堂と見られる「観無量寿堂」を有していたと思われ、阿弥陀信仰の徒でもあったと見られる。

岩田 茂樹(当館学芸部上席研究員)